



野村俊幸（1958-）ステップス初個展である。野村は東京造形大学絵画科を卒業した後、東京藝術大学大学院壁画研究室研究生を経て、1983年からルナミ画廊等の現代美術の現場で活動を開始、休むことなく今日に至る。

野村は今回、《 森の記憶 》とローマ字と数字を組み合わせた題目を持つ、顔料、木炭紙（5点のみ木炭追加）の同じサイズの作品を14枚、5×5=25枚を一組とした《 森の記憶 Brass Breath 》を出品した。

この展覧会は絵画作品であってもインスタレーションであると定義できるほどの、空間性に満ち溢れている。個々の作品が空間全体と対話し、密閉された場所ではなく開かれて呼吸する一つの生命体と化している。

そのため、1点1点を見ても、直ぐに入口から見た光景を思い出さずにはいられなくなる。それでも1点1点を見ようとしても、抽象的畫面を認識することが出来ない。眼を凝らして焦点をあわせると、手前が奥に奥が手前に逃げる。

この往来にこそ、野村の作品の意味が存在する。野村はこれまで壁と土と格闘してきた。それは視覚的作用ではなく、その存在意義にまで問題を掘り起こし、考察を繰り返してきた。視覚も又、身体的活動の一端であることを証明する。

そしてF・ベーコンがガラスケースを好んだように、野村も絵画と視覚を剥き出しに対面させない。ここにある皮膚に、我々は永久に到達することが不可能である。この無慈悲な状態にこそ、野村の芸術の本質が隠されている。

